

## 『江戸から見直す民主主義』を読んで

上原 昇（2組）

同期の皆さん、明けましておめでとうございます。

本年も、65期ホームページ（HP）をよろしくお願いします。

一昨年（2024年）11月に開催された赤松小三郎研究会主催の講演会（シンポジウム）は、「赤松小三郎から見た江戸時代」という演題で、田中優子さん（元法政大学総長）による講演とその後、関良基さん（86期、拓殖大学教授）、橋本真吾さん（北里大学講師）を交え3人でのパネルディスカッションでした。

この講演会には65期からも私も含め何人か出席していますが、24年11月5日付HPで原田義則君（3組）が感想を投稿しています。

[https://ueda65ki.sakura.ne.jp/NEWS/Harada\\_Report241105.pdf](https://ueda65ki.sakura.ne.jp/NEWS/Harada_Report241105.pdf)

このたび、その時の話をベースにした著書が発売されました。

『江戸から見直す民主主義』（現代書館から12月20日発行）というタイトルです。

<https://www.gendaishokan.co.jp/goods/ISBN978-4-7684-5985-0.htm>

早速入手して読んでみました。

昨年末のちょうどそのころ、地元上田の布施修一郎君（6組）から「信毎にこんな記事が出ていたよ」と連絡をもらいました。

12月23日付の信濃毎日新聞の“今日の視覚”というコラムで、田中優子さんがこの本を紹介しながら、「・・・題名は柔らかいが、実は過激な本である」とコメントしています。

<https://www.shinmai.co.jp/news/article/gf01d54b4barsv1n6t317nr0>

どのように過激なのかは、実際本を手にとって読んでもらうこととして、いわゆる明治維新後、今日まで続いている薩長歴史観の見直しの機運が確実に高まっていることを感じさせる刺激的な内容でした。

本の章立ては、1章「江戸の教育」を田中さんが、2章「江戸時代に民主主義を考えた人びと」を関さんが、3章「江戸後期の民主主義概念の輸入と受容」を橋本さんが担当し、4章は3人による座談会となっています。

いずれも講演会で話した内容を深掘りしたもので、赤松小三郎研究会が一石を投じる形となりました。

（2026年1月1日記）

以上